

県歌「信濃の国」作詞者浅井 洌(れつ)

(1) 誕生・・・生家と兄弟

浅井洌は、嘉永2年（1849）10月10日、信濃国筑摩郡北深志の鷹匠町に、松本藩士大岩昇助昌言（まさのり）の第4子で三男として誕生した。長男である昌蔵と洌との間には、一女一男があったが早世している。



洌ははじめ大岩大三郎大義といっ
た。

大岩家の祖先は、三河二連木時代
（1541～1589）から松平氏（戸田
氏）に仕え、藩主の移封に従って
松本に移り住んだ。

兄弟は5人生まれたが、第2子の
長女と、第3子の二男が早世し、
昌蔵、洌、昌成の男子3人が残っ
た。

大岩昌蔵・・・松本平の歌人として活躍。印刷業を営むかたわら、雑誌「清籟新誌」を発行した。父、兄、弟が和歌や文章を載せている。

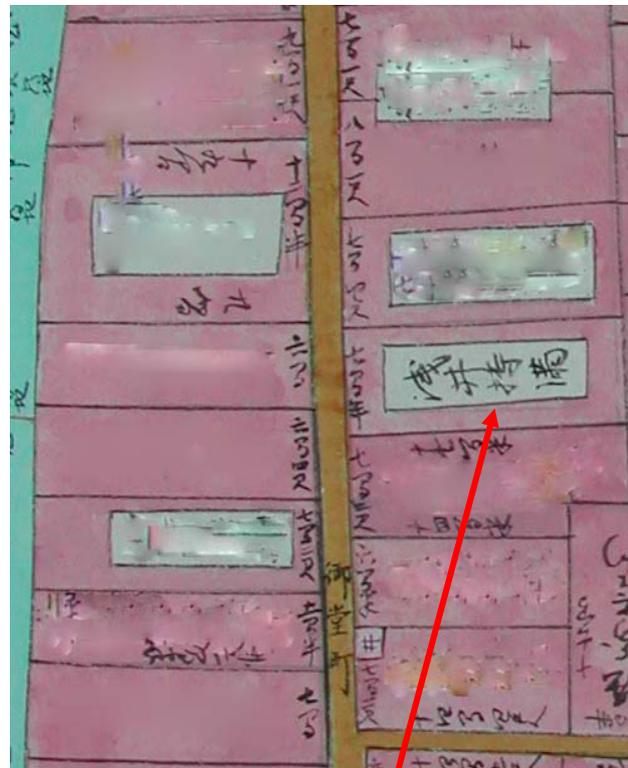
弟の小川昌成は、松本藩士小川氏の養嗣子となり、教員として終始し、かたわら地方歌人として知られた。最後は伊那の下市田学校の校長として十数年勤めた。

(2) 養家・・・浅井家に（鷹匠町から堂町へ）

12歳の時

浅井家は、4代まではどのようなことをしていたかは不明である。5代の政勝（浅井市右衛門）の代に、播州明石の松平丹波守康政に仕えた。以後代々松平氏（戸田氏）に仕え、藩主の所替えによって、濃州加納、志州鳥羽へと移り、7代目の勝保の代に松本にきた。11代の勝輝（幼名、継之助）が、後の浅井持満で、洌の養父である。妻は波（養母）で、二人の間には、第1子の春（洌の妻）のほか、一男（早世）八女がいた（4女は早世）。唯一人の男子である市之助の早世によって、洌が養嗣子として大岩家から迎え入れられ、長女の春が妻となった。

洌が浅井家に移ってから、浅井継之助勝哉、また改めて新吉、洌となった。



浅井持満家（累右衛門持満）

持満（もちみつ）は、藩士から高松小学校（現島内小）の教師に転身する。

(3) 晩年の洌・・・師範学校退職後



大正15年（1926）6月7日、長年勤務した師範学校を退職した。以後和歌と書に親しむ悠々自適の生活にはいった。住居は北馬場の大岩の家で、堂町に新築した家は他に貸したままであったようである。（留守中軍人に） 78歳の時

晩年の住居（現大岩隆宅） 北馬場大岩家 門柱は当時のままか

北馬場には、洌の兄昌蔵が残っていたので（息子の峻は北海道へ）、**荒雄（洌の二男）が浅井家から大岩家の養子**となり大岩を名のるようになった。堂町の浅井家は火災で焼け、洌はその土地に家を新築し（長野にいた頃）、松本に帰ったらそこに落ち着くよう考えていたようである。火災後は天白町に移った。松本に移ってからは、一切の公職から去り、まったく悠々自適の毎日で、夏は朝顔づくりを楽しんでいた。そして菊づくりと自然を友にした。それが長生きの秘訣であったのか。「よい花を咲かせるにはナー、花が咲けるよう、労をおしまず手をかけてやることだ。草花も生きものだからナー」と。（浅井務さん談・・・洌の孫）

- 師範学校の生徒が大勢訪ねてきた。川島浪速、芳子さんが来られた。矢沢さん、河野さん、松商の校長の米沢さん、小里頼永さんらが時々来られた。
- 毎月1回「国風会」という和歌の会で、河原、田村、川船、松林、上田さんらが訪れた。
- 植木、盆栽が好きで、よく手入れなどをしていた。
- 頼まれて揮毫することしばしばだった。読書もしていた。
- 規則正しい生活をしていた。
- 年中行事をきちんと行っていた。祖先の供養・墓参り怠ったことがないくらいである。
- 丈夫で病気らしいものをしたことがない。（子孫談の中から）

昭和13年2月27日、松本市北馬場大岩家において永眠する。神式にて告別式を行い、城山公園市営墓地に埋葬される。享年90歳でした。

「・・・寒い朝でした。部屋があまり静かだったので、虫が知らせたのか私が部屋の障子をあけてみると、祖父は床の上に起き上がって正座し手を合わせていました。呼んでも答えがありません。驚いて私が近寄って顔を覗き込んだ時はほとんど意識がないようでした。さっそく医者に連絡したのですが、到着する前に息をひきとりました。無意識のうちに正座し合掌して、何をおがみ何を考えていたのかいままってわかりません。おそらく祖父にとっては心残りない幸福な大往生だったでしょう。」（丸山澄子記・・・旧姓浅井 「信濃教育」第996号より

